令和５年度　厚生労働科学研究費補助金（肝炎等克服政策研究事業）
分担研究報告書(その他)

中高生の為の出張肝臓病教室

研究分担者：川田　一仁　　浜松医科大学医学部附属病院　肝臓内科

研究要旨：近年、肝炎ウイルス治療の発展は著しいが、一方で未だに新規感染者を一定数認めており、感染予防について積極的な活動を進めていく必要がある。ピアスやタトゥー、風俗など肝炎ウイルスの感染リスクのある行為に興味を持つ年代の中高生に対して肝炎ウイルス教育は十分に行われていない。我々は2020年から静岡県内の中高等学校で出張肝臓病教室を開催しウイルス性肝炎について講義を行ってきた。講義前のアンケート調査から中高生の肝炎ウイルス認知度はB型肝炎48%、C型肝炎30%と低いことが確認された。出張肝臓病教室後には肝炎ウイルス感染の危険性のある行動について約90%の学生が理解していた。しかしながら、1年後には正解率は50-80%程度まで低下しており、定期的な情報提供が必要であることが確認された。一方で肝臓病教室では中高生から両親、祖父母への肝炎ウイルス受検受療勧奨についても提案しているが、配布資料のカラーテキスト化のみでは効果は不充分であり、更なる工夫が必要である。

A.　研究目的

肝炎ウイルスに対する抗ウイルス治療の発展に伴い、B型肝炎は肝炎の進展を予防することができ、C型肝炎に至っては副作用なくほぼ全例で体内からウイルスを排除できるようになった。現在、WHOは2030年までのB型･C型肝炎ウイルス撲滅を目標に設定している。このように抗ウイルス治療は発展している一方で、違法薬物注射や風俗などを介した新規感染は未だに一定数認めている。したがって新規感染者を減らすこともB型･C型肝炎ウイルス撲滅のために重要である。

中高校生はピアスやタトゥー、風俗に興味を持ち始める多感な年代である。特に高校を卒業後にそのような機会に触れる可能性が高いことから、在学中から肝炎ウイルスについて十分に理解しておく必要がある。しかしながら、現状は中高生に対して薬物教育や癌教育は行われているが、肝炎ウイルスに対する教育は行われていない。また中高生の両親や祖父母に対する肝炎ウイルス啓発も子供や孫である中高生から伝えた方がより効果が高いと考えられる。そこで我々は①ピアスやタトゥー、風俗に興味を持つ年代の中高校生にウイルス性肝炎の危険性について学ぶ機会を作る②中高校生から両親や祖父母に肝炎ウイルス受検・受療勧奨を行うという2点を目的に2020年より静岡県内の中高等学校で出張肝臓病教室開催し、肝炎ウイルスをテーマに講義を行っている。

今回、講義前後にアンケート調査を行い、中高生の肝炎ウイルスに対する認知度や理解度について調査研究を行い、中高生に対する肝炎教育基盤の創出を試みた。

B.　研究方法

静岡県教育委員会とスポーツ・文化観光部総合教育局私学振興課から静岡県内の中高等学校へ出張肝臓病教室について案内し、2023年度は応募のあった12校(中学校1校、高等学校11校）でウイルス性肝炎をテーマに講義を行った。肝臓病教室開催前と開催後1週間以内に肝炎ウイルスに対するアンケート調査を行い、講義前の高校生の肝炎ウイルスに対する認知状況、講義後の理解度と家庭内での周知について検討した。

さらに前年度にも肝臓病教室を開催した学校では 1 年後の理解度の状況について調査した。

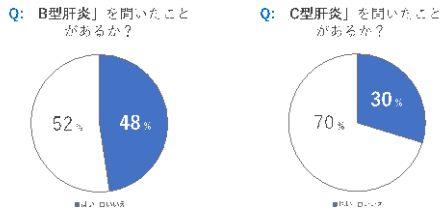
C. 研究結果

合計 4430 人の生徒に対して講義を行い、事前アンケート調査を回収できた 3289 人と事後アンケート調査を回収できた 2740 人で検討した。

I. 中高生の肝炎ウイルスに対する認知度

1. 講義前の肝炎ウイルス認知率

事前アンケート調査結果



「B 型肝炎、C 型肝炎を聞いたことがあるか？」に対して、B 型肝炎 48%・C 型肝炎 30%であり、特に C 型肝炎について 70%の中高生が聞いたこともない状況であることが確認された。

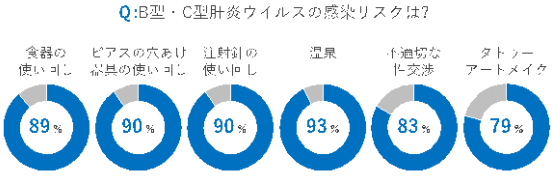
2. 講義後の理解率

講義後に「肝炎ウイルス感染のリスクのある行動はどれか？」

① 食器の使い回し
② ピアスの穴開け器具の使い回し
③ 注射針の使い回し
④ 温泉入浴
⑤ 不適切な性交渉（風俗など）
⑥ タトゥーやアートメイク

上記行為での肝炎ウイルスの感染リスクについて確認したところ、右上の図のように全体的に正答率が高く、一定の理解が得られていることが確認された。

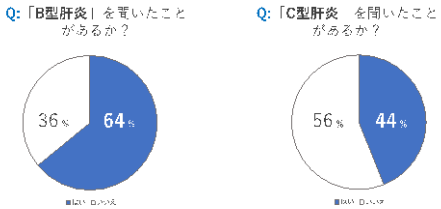
理解度調査結果



3. 1 年後の理解率

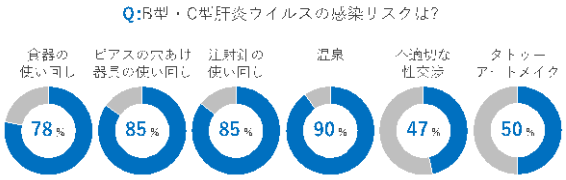
1 校 190 名（高校 2, 3 年生）が前年度も肝臓病教室を受講していたため、1 年後の肝炎ウイルスに対する理解度についてアンケート調査を行った。アンケート内容は①B 型肝炎、C 型肝炎を聞いたことがあるか？②肝炎ウイルス感染のリスクのある行動はどれか？（内容は 2. と同じ）

1年後理解度調査結果



初年度よりも B 型・C 型肝炎ともに「聞いたことがある」が増加しているが、講義を受けたにもかかわらず、「聞いたことがない」との答えも多かった。

1年後理解度調査結果



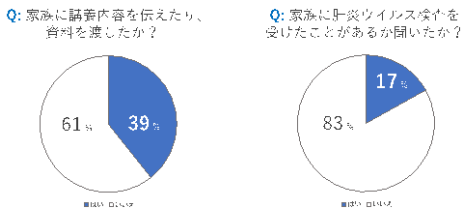
講義後に十分得られていた理解度も 1 年後は総じて低下していた。特に「不適切な性交渉」と「タトゥーとアートメイク」の肝炎ウイルス感染リスクに関する理解度が著明に低下していた。

II. 中高生から家族への周知

1. 講義後の家族への案内

講義中に両親や祖父母へ資料を渡すことと肝炎ウイルス検査の有無の確認、治療案内を強く薦めた。講義後 1 週間のアンケート調査で講義後の家族への周知について確認した。

事後アンケート調査結果

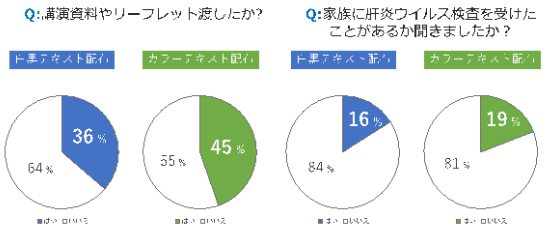


4 割弱の生徒が家庭内で肝炎ウイルスについて案内をしていたが、具体的に検査受検の有無までの確認は充分ではなかった。

2. 講義資料変更による効果検証

講義資料は各学校で白黒コピーし配布していたが、今年度の浜松医科大学社会貢献事業に採択されたことから、カラーテキストの冊子を作成し、6 校で配布した。テキスト変更に伴う家庭内周知の違いについて、変更前（白黒テキスト）6 校と変更後（カラーテキスト）6 校で検証した。

アンケート調査結果



カラーテキスト変更後の方が明らかに両親もしくは祖父母へ資料を渡し、検査受検の有無の確認も増えていた。

D. 考察

I. 中高生の肝炎ウイルスに対する認知

中高生の肝炎ウイルス認知度は B 型・C 型肝炎共に半数以下であった。B 型肝炎の認知度が C 型肝炎よりも高いのは、弁護士事務所による B 型肝炎訴訟を案内する CM の影響が考えられた。したがって、中高生に対して積極的に様々な手法で肝炎ウイルスについて案内をしていく必要があると思われた。

II. 肝臓病教室の効果

1. 中高生の理解度への貢献

肝臓病教室を行うことで講義直後の理解度は 90%程度得られており、充分に内容が伝わっていた。しかしながら、1 年後の理解度は明らかに低下しており、定期的に行う必要があると考えられた。

2. 両親、祖父母への案内

講義後に約 4 割に家庭内で肝炎ウイルスに関する内容を話題にしていた。配布資料をカラーテキスト化にすることで一定の効果が得られていた。しかしながら、効果としては不十分であり、さらなる工夫が必要と考えられた。

E. 結論

中高生年代の肝炎ウイルスに対する認知度は低いため、積極的に知識を提供する機会を作る必要がある。各学校へ出張して講義を行うことで短期理解の効果は非常に高いが、長期的な効果を得るためには繰り返し知識を提供する必要がある。また講義後に家庭内で肝炎ウイルスについて話す機会を増やすことで、両親や祖父母への受検受療へつながる可能性が高いことから、さらなる工夫をしながら肝臓病教室内で推奨していく必要がある。

F. 政策提言および実務活動

＜政策提言＞

なし

＜研究活動に関連した実務活動＞

出張肝臓病教室の開催（中学校 1 校、高等学校 11 校）

G. 研究発表

1. 発表論文

なし

2. 学会発表

なし

3. その他

啓発資材

なし

啓発活動

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし